

【ミニシンポジウム・若手の会特別企画】

出口志向のススメ ～基礎研究をどうやって産業化に結びつけたか～

新家 弘也（関東学院大学）

近年、産学官連携という言葉があるように、アカデミックな研究内容を主体とする大学の研究室でもより実用的な研究が推奨される風潮にある。しかし、基礎研究から派生したシーズが実用化という「出口」に到達する過程をイメージすることは難しい。そこで本ミニシンポジウムは若手の会特別企画として、実際に基礎研究から「出口」までを経験した研究者やその半ばに位置する研究者に講演して頂くことで、アカデミック研究者が「出口」までの具体的なロードマップをイメージし、企業研究者が研究開発における新たな着想を見出す機会となることを期待し企画させて頂いた。

今回はアカデミック研究者2名と企業研究者1名の講演者にお集まり頂き、「出口」を目指した研究についての話題をご提供頂いた。はじめに、大学研究者の塚本佐知子先生（熊本大学）から「海洋資源からのモノトリ研究」の演題で発表があり、天然有機化合物の発見から医薬シーズへの発展、その過程で当初予想していなかった「出口」への到達などいくつかの事例について紹介して頂き、創薬という「出口」への難しさと面白さを感じることができた。次に、研究機関研究者の大田ゆかり先生（海洋研究開発機構）から「海域におけるリグニンの微生物代謝の理解からホワイトバイオへ」という演題で発表があり、主な陸上バイオマスである植物由来のリグニン注目し、その有効利用を目指した研究について紹介して頂き、リグニン生分解性細菌の発見の苦労話やリグニン分解産物のバイオプラスチックへの応用など具体的な「出口」への流れを俯瞰することができた。最後に、企業研究者の瀧村 靖先生（花王株式会社）から「藻類を利用した持続可能な油脂原料の開発」という演題で発表があり、油脂の代替原料として藻類の脂肪酸に注目した研究について紹介して頂き、研究シーズから「出口」を探索するのではなく、「出口」から研究シーズを探索していく企業の視点が大変興味深かった。

大学、研究機関、企業と立場の異なる研究者の視点を通じて、実際に「マリンバイオテクノロジー」が実用化されるまでのロードマップがイメージできたのではないだろうか。当日は100名近い聴衆が会場に訪れ、その中には立ち見の聴衆も見受けられた。また、いずれの演題に対しても活発な質疑応答がなされ、研究者が基礎研究の「出口」への道筋に非常に高い興味を抱いていることが窺えた。本シンポジウムを通して、アカデミック研究者や企業研究者が議論を交えることができたのは、新たな「マリンバイオテクノロジー」を創出できる関係を築ける契機となったのではなかろうか。